

# 「忘れられたのは誰か」をめぐる ヴラーナとの対話，ハヴェルとの差異

In Search of the Answer from Transcendence: A Dialog with Karel Vrána on a  
Question “Who Did We Forget?” and the Difference from Václav Havel

野 田 伊津子 \*

Itsuko NODA

キーワード：①マリー・ローランサン ②神の超越性 ③忘却 ④亡命  
⑤チェコ語

## 論文要旨

本稿は、マリー・ローランサン（1883-1956）が「鎮静剤 *Le Calmant*」によって提示した普遍的な痛みに対し、「忘れられたのは誰か」という問いを抱きながら、神学者カレル・ヴラーナ（1925-2004）が言葉について述べた論稿と対話し、劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル（1936-2011）との違いを探ることによって、忘れられたのは誰か、忘却される恐怖はどこからくるのか、そして、この恐怖への処方箋を明らかにすることを目的とする。第一に、ヴラーナとハヴェルが言葉に対して理想としていることを示した。第二に、神との関係に光をあてた。第三に、支配階層が言葉に対して知覚していることに着目した。第四に、「忘れられたのが誰か」について、論考を通して導かれる処方箋が有効であるための条件までを検討して結びとした。

\* 金城学院大学キリスト教文化研究所 客員研究所員。  
金城学院大学エクステンション講座チェコ語講師。

## I. はじめに

夢見るような色彩で知られる画家マリー・ローランサンMarie Laurencin (1883-1956) が亡命していたスペインのバルセロナで1917年に“Plus que morte / Oubliée.”と詠んだ詩を「死んだ女より／もつと哀れなのは／忘れられた女です。」と訳したのは堀口大學(1892-1981)だったが、この詩を本国フランスより日本で有名たらしめたのは、堀口の名訳に尽きると言えるだろう。忘れられたのが誰なのか、実は原文では明確に示されていない。ただ、形容詞が女性名詞にかかる形で示されているため、誰か女性であることが読み取れるだけである。本人なのか、特定の知人女性なのか、判断は読む人に委ねられている。ローランサンと面識もある堀口が大胆に訳出したが、もし原詩の曖昧さを残して忠実に読めば、そこには名を出さない懊悩が伝わるとともに、さらに広い解釈を受け入れてくれる素地を見出すことができる。もし死後に対する何か信仰がなければ、死は究極の終わりであり、愛着ある全ての存在との別れになる。どれほどの恐怖だろうか。想像を絶する孤独である。しかし、ローランサンは、忘れられる方がより厳しいと詠う。そこには、愛を求めてやまない人の姿がある。

“Le Calmant”

Plus qu'ennuyée

Triste.

Plus que triste

Malheureuse.

Plus que malheureuse

Souffrante.

Plus que souffrante

Abandonnée.

「忘れられたのは誰か」をめぐるヴラーナとの対話、ハヴェルとの差異

Plus qu'abandonnée  
Seule au monde.  
Plus que seule au monde  
Exilée.  
Plus qu'exilée  
Morte.  
Plus que morte  
Oubliée.

堀口訳では、

鎮静剤

退屈な女より  
もつと哀れなのは  
かなしい女です。

かなしい女より  
もつと哀れなのは  
不幸な女です。

不幸な女より  
もつと哀れなのは  
病氣の女です。

病氣の女より  
もつと哀れなのは

捨てられた女です。

捨てられた女より  
もつと哀れなのは  
よるべない女です。

よるべない女より  
もつと哀れなのは  
追はれた女です。

追はれた女より  
もつと哀れなのは  
死んだ女です。

死んだ女より  
もつと哀れなのは  
忘れられた女です<sup>1</sup>。

では、それほどまでに忘却されるのを恐れ嫌うのは何故か。極めて個人的な内容を詠った詩ながら、普遍性を伴って読む人に訴えるのは、そこに人の関心を求めて絶望的な叫びをあげる声を聴くからである。

ところで、その絶望や恐怖は女性だけのものだろうか。最終的には死によって世における全てを失い、忘れられるのは男も女も関係ない人間の宿命と言えるのではないか。それゆえに、この詩は力強い訴求力を持つ。で

<sup>1</sup> 1925年4月に出版された初版における最終行は「忘れられた女です。」となっているが、その後出版された『堀口大學全集7』および『堀口大學全集8』における再録では「忘れられた女です。」と修正されている。本稿では出来る限り初版を忠実に引用し、この部分は全集に従った。

は、私たちは誰を忘れたのだろうか。そして、なぜ忘れられる恐怖を知るようになったのか。

本稿は、この詩によって提示された普遍的な痛みに対して、「忘れられたのは誰か」という問いを抱きながら、神学者カレル・ヴラーナ Karel Vrána (1925-2004) が言葉について述べた論稿と対話し、劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル Václav Havel (1936-2011) との違いを探ることで、忘れられた存在が誰だったのか、忘却される恐怖はどこからくるのか、この恐怖への処方箋はあるのか、あるとすれば、それは何かを探ることを目的とする。四つの福音書がキリストの生涯をそれぞれ違う視点から記述したことで同じ事象に対して理解が深まったように、このローランサンが謳った事象に対してヴラーナおよびハヴェルという異なる方向から光をあてることで、よりはっきりと見えるようにしたい。第一に、ヴラーナとハヴェルとの関係を明らかにし、それぞれが言葉に対して理想とすることは何かを示す。第二に、忘却の対極は何かを念頭に、神との関係に光をあてる。神との関係に注目することによって、詩の対象が、男性ではなく、女性であることで深まる切実性を説明する。男女区別ない事柄を謳っているにも拘わらず、あえて女性を対象にしたことによる伝達の効果を確認する。第三に、支配階層が言葉に対して知覚していることに対して、神学者と文学者との立場の違いで、捉え方にどのような違いが出ているかに着目する。背景とする当時の政治状況による特殊性がかえって二人の言葉に対する切実な向かい合いを要求したとしか思えないが、お蔭で今日、私たちは平時にあって忘れがちな真実に気づかせられる。第四に、「忘れられたのが誰か」に関して、これまでの論考を元に答えを見出し、なぜ私たちが忘れられる恐怖を知るようになったのかを探り、そこから必然的に導かれる処方箋へと向かう。処方箋が有効であるための条件までを検討して、本稿の結びとする。

ヴラーナとハヴェルによる原稿の底本としては、『言葉の使命と誘惑

『*Poslání a pokušení slova*』に所収された、ヴラーナによる「著述者としての使命と誘惑 *Poslání a pokušení spisovatele*」と、ハヴェルによる「言葉についての言葉 *Slovo o slovu*」を対象として用いた。対象として選んだ理由をⅢで述べる。

## Ⅱ. 先行研究

先行研究調査は、和文は CiNii に対し著者名 Václav Havel および (Karel) Vrána<sup>2</sup> を鍵言葉として検索を行い、一篇も存在しないことを確認した。欧文は論文データベース (Web of Science, Ebsco host, Jstor, ProQuest) に対し、Václav Havel に Vrána を加えた検索を行った。Web of Science, Ebsco host は該当なし、ProQuest において一篇の資料を得ることができた。

Jstor のみは該当件数が極めて多かったため、まず文書種類を Article または Review に限定し、出版年をハヴェルの生誕から論文執筆時である 2016 年までに区切り、41 件まで絞った。この時点でリストに上がってきたタイトルを概観した結果、さらに検索対象を絞る必要に迫られ、Vrána が神学者であることを考慮して英語でキリスト教 Christianity, チェコ語でキリスト教 křesťanství, 独語でキリスト教 Christentum をそれぞれ加えた。結果、英語と独語は三篇で内容は全く同じであり、チェコ語は一篇であった。よって Jstor においては四篇の資料を得ることができた。

これら五篇を検討した結果、残念ながら、おおよそは記録的な性質を主とする文書で、ピンセントによる論文 Pynsent, Robert B. “Social Criticism in Czech Literature of 1970s and 1980s Czechoslovakia.” を除いては検討対象にならなかった。あえて付け加えるなら、Glass, D. C. K. “LITERATURE, 1830—1880.” *The Year's Work in Modern Language Studies*, vol. 47, 1985,

<sup>2</sup> カレル Karel という名前は、作家カレル・チャペック Karel Čapek (1890-1938)、首都プラハにあるカレル大学 Univerzita Karlova にも使われているほどチェコにおいて一般的な名であるため、ヴラーナに関しては姓のみを用いて検索した。

p. 792.によれば、ヴラーナは独語でニーチェに関する批評 *Ns Kritik des christlichen Gottesbegriffs: Zur Frage ihrer Funktion, Intention und Organisation* を残している。

### Ⅲ. なぜヴラーナとともにハヴェルを検討する必要があるのか

ヴラーナは、共産党一党独裁による言論統制下チェコスロヴァキアにおいて、ハヴェルと同時代に執筆活動を続け、時にはパヴェル・ジェリヴァン Pavel Želivan という偽名を用いて神学、哲学、人類学、文化、芸術、自然科学にいたるまで実に広範な内容を扱った文書を発表していた。ハヴェルとの違いは一党独裁政権が支配していた期間は国外に亡命していたこと、該博な知識に通じながらも終生ローマ・カトリックから軸足を移すことがなかったことである。ピロード革命以降、ハヴェルが注ぐ情熱の対象は、必然的に半ば政治に移さざるを得なかった感があるが、ヴラーナにとってのキリスト教はエッセイを読めば分かる通り、あらゆる対象、特に文学を論じる際の基盤であったと言える。殊にプラハを中心に生活していたフランツ・カフカ Franz Kafka (1883-1924) に筆が及ぶ時、おそらく彼が背負っていた十字架に対して、批評家として対象に対する距離を忘れたかのような慈父に近い批評を残している

Nešťastný a pokorný Franz Kafka prožíval své spisovatelské charisma jako určitý druh náboženství. Psaní se mu stalo modlitbou, zoufalým, radikálně znejistěným hledáním záchranu. Není nakonec náhoda, že křesťanské dějiny spásy se uzavírají a naplňují v lidsky sepsaném Slově Božím. (Vrána 12)

不幸せで謙虚なフランツ・カフカは、自身の執筆者としての賜

物がある種の信仰として経験しました。彼にとって書くことは祈りによって惹き起こされました。すなわち、絶望的で徹底的に自信を無くした救いを求めることによって始められました。キリスト教の救いの歴史が慈悲深く予定された神の言葉のうちに閉じられ満たされるのは、最終的には偶然ではありません。(Vrána 12)

ハヴェルは大統領に就任後、ヴラーナに勲章を与え、その死後に、言葉と権力、言葉と真実との関係について、共通の問題意識を持つお互いの文章を一つにまとめて出版した。本稿において比較及び分析対象として用いた『言葉の使命と誘惑 *Poslání a pokušení slova*』には、ヴラーナによる「著述者としての使命と誘惑 *Poslání a pokušení spisovatele*」と、ハヴェルによる「言葉についての言葉 *Slovo o slovu*」が共に所収されている。ヴラーナによる原稿は、ヴラーナが亡命先で1977年に出版した。邦訳は無い。ハヴェルによる「言葉についての言葉 *Slovo o slovu*」は、1989年10月、旧西独フランクフルト・アム・マインの国際書籍見本市に際しての平和賞受賞スピーチ原稿で、ハヴェルが出国不能のため、代読された。こちらはビロード革命直後に飯島周氏による翻訳が出版されているので、読んでおられる方も多いただろう。二つのエッセイに共通する問いは、言葉が自分自身の事実に対する関係を失い、それによって歪められるという状態はいかにして起こり、どのような対処または捉え方が可能かということである。無論、神学者ヴラーナと劇作家ハヴェルとでは、視座も、論点も、立ち位置も、挙げる事例も、結論も、何もかも異なり、かろうじて言葉に関して幾つかの点で同じ現象を見ていることが伺い知れるだけである。しかし、この両者の違いを用いることによって、ローランサンの痛みに対して異なる方向から光をあてることができるのではないかということである。

ハヴェルは言葉を発する主体それ自体よりも言葉に注目し、同じ言葉が



真逆の意味に使われてきた自国の現代史に触れる。対してヴラーナは言葉を発する著述者自身に注目する。もっとも際立つ違いは、ハヴェルが数多くの事例を挙げて、言葉に対して懐疑を忘れないことが結果として、歴史的にも政治的にも人々を守ることを主張する一方で、ヴラーナは言葉それ自体より、その発する主体に着目する点である。

Poetický pramen, je-li silný a dostatečně hluboký, jak je tomu u podstatných básníků a spisovatelů, nebude nikdy zcela znečištěn, zabahněn nebo otráven. V jejich životě jsou milostí obdařené chvíle, kdy poetické prameny dávají ze svých skrytých hlubin - navzdory všemu očekávání – čistou, osvěžující vodu. (Vrána 17)

詩的な泉は、もしそれが本物の詩人たちや著述家たちのそばにある状態が力強く十分に深みがあれば、決して全く汚されたり、泥で塞がれたり、毒を混入されたりしません。神の恩寵によって、彼らの人生のなかで祝福されたひとときは、詩的な泉が、それ自身の内部の深みから—予想すべてに反して—清らかで元気を与えてくれる水を与えてくれる時なのです。(Vrána 17)

例として、サルヴァドーレ・クァジモド Salvatore Quasimodo (1901-68) が無神論者であることを開示した時ですら、彼の書く詩には宗教的で献身的な価値が溢れていたと示す (Vrána 18)。ヴラーナは、目に見えない神の性質を見ようとしないうる人間にとっては真に不可解な主張をするのである。その人に与えられた賜物、神からの贈物は外部からの圧迫や体制によっては変えられない、たとえ本人が神を否定してはすらも、神から与えられた賜物は内部から溢れ出てくると言う。もし、その人の中にある神の見えざる性質に目を留めるなら、たとえ現在がどうであっても、神から

与えられた贈物が変わらないと言うのは理解できる。ただし、あくまでも神に目を留め、神の視点で相手を見ようとするならば、である。ヴラーナはクアジモドの例から、自国の言論統制時代に触れ、たとえ外部からの影響で、チェコの著述者たちが共産主義体制に表面だけか、あるいは心からか迎合し、神を否定するような文章を綴ったとしても、彼らの内部に与えられている神の賜物は変わらないし、変えられないと言うのである。真の創造の泉は、どのような汚泥にあっても道を作り、毒を洗い流すことができると言うのである。真の創造の泉は、外部からの操作の痕跡を残さないと主張する (Vrána 18)。

ここにおいて、ローランサンが謳った痛みを目を向ければ、ハヴェルの視点から見てローランサンは感情のままの言葉を紡いでいることになり、そこには、自由に言葉を発することができるローランサンの豊穡な自由さにもみ目が止まる。しかし、ヴラーナの視点から見れば、ローランサンの謳った痛みは想像できる痛みであり、何らかの事情で思うに任せない状況にあっても、その人の中に神から与えられた光は変わらないし、変えられないということになるのではないか。放蕩息子の帰りを待つ父のように、神は常に待っていてくださるのだが、その光に本人が気づき、認めるか、受け入れるかは本人の全くの自由意思である。神から委ねられ、任された自由の範囲なのである。この神の忍耐は、人間の基準、想像の範疇をはるかに超えていて、にわかには理解しがたいが、父の元に戻って赦された者のみを知る忍耐の大きさである。

#### IV. 忘却の対極

忘却の対極は記憶である。人間は忘れる。良いことも悪いことも、個人差もあり、程度の差こそあるが、時間とともに何もかも風化していく。いつまでも忘れられないこともあるだろうが、人間が忘れられないと言うのは大抵、感謝、嬉しいことではないようである。筆者は「この御恩は忘れ

られない」というのを、ありがたいことがあってから十数年も経って未だ周囲に語る人を多くは知らない。全く知らないわけではないから、それも感謝であるが、一方、神からどれだけの恵みをいただいたかということまで忙しい日常の中で忘れてしまうのが通常の人間の姿ではないか。しかし、それは神から見たときに、どれほど恩知らずで悲しい出来事だろう。命を与え、日々関心を持ち、親が子の世話をするように神は人に関心を持っておられると聖書は随所で伝える。それどころか、たとえ実の母親が忘れても神は忘れないとおっしゃるのである<sup>3</sup>。ここで父親ではなく、母親が出ていることは印象深い。多くの人にとって最初の近い関係は母であるからである。

詩「鎮静剤 *Le Calmant*」は、神と人との関係に注目することによって、詩の対象が、男性ではなく女性であることで深まる切実性に気づかせてくれる。聖書にある通り、母は余程の事情でない限り、自分の子を忘れない。自分の身を割いて産み、一部の心理学者に非難されるほどの一体感を子に対して持つ。幼い子にとっては地上における神の代理人のような存在ですらある。ところが、そのような母を子の方は簡単に忘れやすい。子の自立とともに一定の距離を持つことも、成長の一過程とみなされる。これは母から見たら、どうだろうか。頭では分かっているけど、ひどい裏切りに感じないだろうか。多くの人が大なり小なり母、すなわち幼い日に最も身近で世話をしてくれた女性に対して不義理をしている。正常な関係においては、子が母に割くより、母が子に割く方が関心も時間も大きいからである。ここには愛情の超過がある。詩「鎮静剤 *Le Calmant*」は男女区別ない事柄を謳っているにも関わらず、主体が女性であることで、多くの人が無意識に感じている母に対する申し訳なさを背景に伝達の効果を高めているように思われる。これが父だったらどうだろう。放蕩息子が改心して帰って来る

<sup>3</sup> 「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」(Isa. 49.15)

のを忍耐して待つ父の姿には、子から見て愛情の超過という申し訳なさよりも、忍耐する力強さがあるし、何よりも、その間、父は働いている。現実の父なら、さらに気楽に子の目に映るかもしれない。ローランサンは計算したわけではないだろうけれど、その詩の視線が図らずも母が自立した子に向ける眼差しを想起させることで、より広い支持を得たと思われるのである。

## V. 支配階層が言葉に対して知覚していること

神学者と文学者との立場の違いで、捉え方にどのような違いが出ているかに着目する。背景とする当時の政治状況による特殊性がかえって二人の言葉に対する切実な向かい合いを要求したとしか思えないが、お蔭で今日、私たちは平時にあって忘れがちな真実に気づかせられる。まず、ヴラーナが考える著述者のカリスマ性と、支配階級との関係について、歴史的な経験から以下のように述べる。

O moci spisovateleškého charismatu vědí ovšem velice dobře i „mocní tohoto světa“. Vždy o ní věděli, vždy se jí obávali a vždy se pokoušeli – a dodnes pokoušejí – sobě tuto moc podřídit. Ve svém mocenském instinktu byli a jsou nakolik inteligentní, že vědí, že bez spisovatele, bez jeho psaní a jeho slova nemohou úspěšně vládnout lidem. Také Stalin věděl, že jeho moc by nebyla dostatečně totální, dostatečně zajištěna, kdyby mu spisovatelé, inženýři lidských duší, nového socialistického člověka, odmítli spolupráci. (Vrána 12-13)

著述者が持つ賜物の力については、もちろん「この世界の力ある人々」も非常によく知っています。彼らは、それについて、いつも知っていて、いつもそれによって恐れ、この力を常に自

らの側につくように誘惑しました —— 今日にいたるまで誘惑しています ——。彼ら（力ある人々）は自分自身の力の衝動のなかにあつて、著述者なしには、彼の著述と彼の言葉なしには、成功裡のうちに人民を支配できないということを知っているほどに賢かったし、今も賢いのです。スターリンもまた、もし著述者たち、すなわち人々の魂を扱う技師たち、新しい社会主義的な人間を扱う技師たちがスターリンとの協働を拒否したら、彼の力が充分には全体に行き渡らず、充分には確立されないことを知っていました。(Vrána 12-13)

ここではスターリン Iosif Vissarionovich Stalin (1879-1953) が例示されている。知られているように、ショスタコービチ Dmitriy Dmitrievich Shostakovich (1906-75)、パステルナーク Boris Leonidovich Pasternak (1890-1960)、ゴーリキー Maksim Gor'kiy (1868-1936) ら芸術家たちは、いずれも独裁者スターリンとの「適切な」距離をとることに苦心している。著述者、特に神から人を惹きつける芸術の賜物をいただいていた彼らは、自らの内部に湧き出る創造の泉にのみ従うことを望みつつも、スターリン統治に協力的な内容、スターリンの考えを推進する内容であれば問題なく発表することができた一方、スターリンに対立すると見做された場合には呵責ない弾圧が待ち構えていたため、激しい葛藤が少なからずあったことが知られている。賜物のある芸術家がいなくてもスターリンは統治したかもしれない。しかし、現実には、スターリンは自らの統治に彼らの賜物が必要であることを見抜き、あらゆる手段を用いて管理下に置こうと試みたのである。

一方、ハヴェルは、間も無くビロード革命が起こるという数ヶ月前に、次のように述べている。

má univerzální platnost: totiž ze zkušenosti, že se vždycky vyplácí být

ke slovům podezřívavý a dávat si na ně pozor a že žádná opatrnost tu nemůže být zbytečně velká.

Podezřívavostí ke slovům se dá rozhodně zkazit míň než přemrštěnou důvěrou v ně. (Vrána 60)

(私の経験は) 普遍的な有効性を持っています。つまり、経験から、言葉に対して疑いを持った状態であることと言葉を監視することに常に報いること、それぞれの用心が無駄に大きいということにはなり得ないということです。

言葉に対する疑いによって、言葉の中に法外に信頼するよりも、確かに腐敗を少なくすることができます。(Vrána 60)

言葉に対する懐疑の必要性である。この後、知識人の役割とは権力者の言葉をよく聞き、それを監視し、それについて警告し、何か悪しきことを意味しうるか、またはもたらしうるかを予言すること、すなわちカッサンドラの役割を果たすべきだと述べている。ハヴェルは一人の劇作家として自由に表現することを追求し続けた結果、この後に計らずも政治家となったが、カッサンドラの役割はむしろ政治を預かる側にこそ求められる一つの理想であることを鑑みれば、これは統治する側にも、される側にも通じる見識が披露されていると言えるのではないか。芸術家であった人が政治を預かる側に立つ事例は、私たちに絶妙な平衡感覚を提供してくれている。

## Ⅵ. 「忘れられたのは誰か」に関して

これまでの論考を元に考えれば、なぜ私たちが忘れられる恐怖を知ることになったのか、明らかである。それは、私たちの方が神を忘れたからである。もっと身近でいうなら、幼い自分を育てた人に不義理になりがちだからである。そこから必然的に導かれる処方箋は、忘れられる恐怖を忘れ

る為に、こちらが忘れないことである。聖書もまた「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(Ps. 103.2) と伝える。この言葉を持って、ローランサンの訴える普遍性のある痛みへの処方箋としたい。特に神に対して、地上で一方的に愛してくれた存在に対して。経済的なことは分からない。しかし、もし衣食足りて、というなら、忘れられる恐怖は、こちらが過去に愛されたことを忘れないことで随分と解消されるのではないか。忘れないだけでなく、具体的に忘れていないことを行動で示すことで、自分の心の中にとらわれないで済む。そして、この処方箋が有効であるための条件は、まず神ご自身が私たちのことを覚えておられること、愛してくださっていることを忘れないことであることを確認して、本稿の結びとしたい。

「あなたの神、主は、あわれみ深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、あなたの先祖たちに誓った契約を忘れない。」(Deut. 4.31)

## 引用文献

Glass, D. C. K. "LITERATURE, 1830—1880." *The Year's Work in Modern Language Studies*, vol. 47, 1985, pp. 762–801. [www.jstor.org/stable/20867683](http://www.jstor.org/stable/20867683).

Horiguchi, Daigaku. *Gekka No Ichigun: Yakushishu*. Tōkyō: Daiichi Shobo, 1925. Print.

---. *Horiguchi Daigaku Zenshū: 7*. Tōkyō: Ozawashoten, 1983. Print.

---. *Horiguchi Daigaku Zenshū: 8*. Tōkyō: Ozawashoten, 1986. Print.

"Individual Works." *Shakespeare Quarterly*, vol. 50, no. 5, 1999, pp. 643–831. [www.jstor.org/stable/2902383](http://www.jstor.org/stable/2902383).

Laurencin, Marie. "Le Calmant." *391*. 4 (1917) : 6. Print.

Pynsent, Robert B. "Social Criticism in Czech Literature of 1970s and 1980s Czechoslovakia." *Bohemia* 27 (1986) : 1-36. Print.

*Seisho: Shin Kaiyaku*. Tōkyō: Inochi No Kotobasha, 1981. Print.

Vrána, Karel, and Václav Havel. *Poslání a Pokušení Slova: Dvě Eseje*. Svitavy: Trinitas, 2009. Print.

カレル・ヴラーナ Karel Vrána (1925-2004)

カトリック司祭，哲学者，神学者，教育者。チェコにおける1948年二月政変による文化的亡命者。ローマで神学の学びを終え，1950年代の前半にチロル地方で牧会生活を行う。1955年から77年にかけては南イタリアにある神学研究所で，1980年代にはローマにある司教ラテラノ大学で教鞭を取り，同時に学長として地方のチェコ学生寮に仕えた。亡命中，1951年に「キリスト教学術チェコ文化協会」を共同設立し，導いた。1958年に雑誌『Studie』を創刊し，編集に携わる。1960年代からヴァティカン・ラジオ，自由ヨーロッパ，ドイツ語波でチェコ放送と協働した。パヴェル・ジェリヴァンという偽名によって執筆活動をしていたこともある。その範囲は広く，神学や哲学のみならず，人類学，文化，芸術，自然科学にまで及ぶ。チェコと世界の文学と詩には，常に特別の注意を払っていた。1992年に故国へ帰還した後，カレル大学カトリック神学部で教授となり，司祭として仕え，ローマ・カトリックアカデミーの議長を務め，編集の仕事を続け，若い作家たちの出版を助けた。チェコ語による著作の一部として，『Experiment křesťanství』(1995)，『Teilhard de Chardin』(1968)，『Svoboda k pravdě』(2008) などがある。

#### 【謝辞】

本研究は，2015年度キリスト教文化研究所活動補助に基づいて行われたものです。ここに記して感謝を申し上げます。